

## 演奏

## オラトリオ 「天地創造」

Franz Joseph Haydn (1732~1809)

木川田 誠

(本学講師一声楽)

1790年エステルハーツィ家での地位が「名誉楽長」の称号に変わり、自由の身になるや、ハイドンは Salomon のすすめに従い二度も英国を訪れた。彼はその旅行の為に「ザロモン交響曲」と呼ばれている十二曲の交響曲を作曲し、ロンドン公演では自身で指揮し、圧倒的な成功をおさめたが、その旅行の結果、彼は作曲家としての自己を省りみて、新たな創作意にとりつかれたのである。その契機となったものは、ウエストミンスター寺院でのヘンデル記念祭に出席し、彼の作品より異常な感動を得たことにあった。全く、彼の最後を飾る二つの傑作、「天地創造」と「四季」は、ヘンデルの影響を除いては考えられない。

もともと「天地創造」のテキストは、詩人 Lidley がヘンデルの為に編じたものであるが、どうした為かヘンデルは放置し、ハイドンを帰国の際に持ち帰り、Van Swieten に依頼して独訳したものをテキストにしているのも、不思議な因縁である。

1795年、帰国するやハイドンは「天地創造」の作曲に専念し、三年を費して完成した。曲はその名にふさわしく壮大で重厚な構成をもち、独唱、重唱、合唱の配分の見事さは、ヘンデルの影響の上にハイドンは交響曲や室内楽でみせた構成上の手腕と理念が十分に示され、ハイドンの生命が脈々としている。然もヘンデルのそれより、劇的であり、自由に内容を表現していることなど注目すべき作曲態度といわねばならない。

アリアには、当時流行のイタリア風の技巧的な面を、素朴で健康的な旋律に加えて用い、合唱は写実的な管弦楽部と絶妙に調和して、器楽でみせた展開の手法が最高度に発揮され、むしろ器楽的に取扱われてさえる。

曲は三つの部分よりなり、第一、二部は旧約聖書創世紀第一章1~34節に依り、六日間に亘る神の天地創造を物語り、第三部は一転して、Milton の“Paradise Lost” 第七篇に依り、アダムとイヴの物語りとなっている。

No.20 Recitative : Raphael.

(創世紀1:24) 神は又言われた「地は生物を種類にしたがっていだせ。家畜と、このものと、地の獣を種類にしたがっていだせ」No.21. Recitative : Raphael.

管弦楽の伴奏に依るアリオゾ風なレントァティヴで、神が獣を創造し給う過程を唱い、それと共に伴奏部は描写的に獅子や虎・鹿・馬・地を這う爬虫類等を暗示する。

No.22. Aria.

「今や天は光榮に照り輝く。」と鳥獣が此の世に生れたことを讃えながらも、「神の恵みを讃えるべき被造物未だ足らず」と人類誕生への期待が唱われる楽節。

(佐藤允彦)